

青年期におけるパーソナリティが 記憶バイアスに及ぼす影響

国際電気通信基礎技術研究所脳情報通信総合研究所認知機構研究所数理知能研究室 館 香 織

I. 問題と目的

1. 記憶のメカニズムと記憶バイアス

記憶とは、情報を登録、保持、検索するという複雑な過程であり、文献的には、短期（あるいは作動）記憶と長期記憶とは関与する脳機能が異なることが示唆されている（Spren & Strauss, 1998/2004）。検索過程は、顕在記憶（explicit memory）あるいは宣言的記憶と、潜在記憶（implicit memory）あるいは手続き記憶を含めた複数のシステムからなるとされている（Kolb & Whishaw, 1995; Schacter & Tulving, 1994）。

記憶を利用する時の、「過去の経験を思い出している」という意識を想起意識と呼ぶ（杉山ら, 2015）。顕在記憶とは検索時に想起意識を伴う記憶のことである。それに対して、潜在記憶とは、想起意識を伴わない記憶のことである。すなわち、顕在記憶と潜在記憶は、想起意識の有無によって区分された記憶である。

日常生活において、時に誤った情報や偏った情報を記憶することは多く見られ、その1つとして記憶バイアス（memory biases）が挙げられている。近年、認知情報処理の歪みの結果、不安が生起するという認知情報処理的アプローチが注目されている（Eysenck, 1992/1994）。情報処理の歪みである認知バイアスの中に、感情を伴う情報を思い出しやすくする記憶バイアスがある（Mathews & MacLeod, 1994）。記憶バイアスは、情報の貯蔵、検索などの内的情報処理過程で脅威情報に偏った処理が行われる現象を指し（藤原ら, 2002）、感情的な情報についての記憶の歪み・偏りのことである（杉山ら, 2015）。

例えば、自分が仕事で失敗した時などのネガティブな出来事ばかりを思い出しやすい一方、自分が仕事で成功した時などのポジティブな出来事は思い出されにくいなどの現象が挙げられる。この場合の記憶バイアスは、憂うつな気分、悲観的な考え方、ネガティブな思考に繋がっている。その他にも、嫌な出来事よりも楽しい出来事を思い出す「ポジティブ優位性バイアス」や、過去の自分を美化する「自己中心性バイアス」など、さまざまなものがあるとされている。

記憶バイアスが生じる原因として、多くが抑うつや不安、神経質などから派生する情動との関連と考えられている（杉山ら, 2015）。記憶バイアスに大きく関わると想定される脳部位として、扁桃体（amygdala）、海馬（hippocampus）、尾状核と被殻（caudate and putamen）、腹内側前頭前野（ventromedial prefrontal cortex: VMPFC）が挙げられる（Disner et al., 2011）。扁桃体の活動は、主に情動生起や情動記憶の形成において重要な役割を果たすことが広く知られている（Bear et al., 2007）。扁桃体は、エピソード記憶の形成に重要な海馬と（Steinvorth et al., 2005）、フィードバック処理やスキル学習と関連する尾状核の活動を調整することで（Packard et al., 1994）、情動刺激の符号化と検索を促進する（Adolphs et al., 1997）。また、枝川（2006）によると、記憶を定着させる方法に、情動による記憶増強作用がある。海馬に近い位置に存在する扁桃体が情動を司っているが、情動は外界からの刺激によってその高ぶりが生じると言われている。その記憶が鮮明であることが多いのは、この情動による記憶増強作用が働いているためと考えられる。情動による記憶増強作用が負の

方向に向かうと、時に心的外傷後ストレス障害 (post traumatic stress disorder: PTSD) を引き起こし、トラウマの出来事となった出来事の記憶が長期間にわたって鮮明に保持される (Terr et al., 1996)。PTSD は、忘却すべき記憶が残り、嫌な記憶を思い出すたびに情動が高まり、さらに記憶を増強するという悪循環がうまるとされる。PTSD の場合、事件の瞬間の出来事を鮮明に覚えているものの、それは不正確であるという意見もある (松本, 2015)。

2. パーソナリティ特性と記憶バイアス

沢田 (1956) はパーソナリティの意義について、個人の示す日常の行動、態度は、その生活場面に応じて変化し、時間の経過につれて様々な表現をする。かかる多様な姿態も、その個人の精神、身体の全体的統一像の表現であり、そしてその基礎となっている統一的全体の比較的恒常な情緒、意志的特性の総体をパーソナリティとしている。つまり、パーソナリティは、個人の生得的、感情的素質としての気質を下位構造として、各個人が、後天的に獲得的に環境との交互作用によって形成していく、情緒的意志的特性の総体である。

顕在記憶における記憶バイアスの強さに影響を及ぼすものとして、気分の強さや不安、抑うつ要因が挙げられている (Wells & Matthews, 1994/2002)。Matt et al. (1992) は、抑うつ者における顕在的な選択記憶バイアスの有無について検討し、抑うつ者はポジティブな単語と比してネガティブな単語を多く思い出すと述べている。この結果は、感情価を伴う表情写真を用いた実験においても支持されている (Ridout et al., 2009)。抑うつ者は、幸せな表情や中性的な表情と比して悲しい表情を多く記憶し、健常者と比較した場合、悲しい表情の再認記憶が多い一方、幸せな表情の再認記憶が乏しいという結果となっている。この結果は、対人場面の記憶想起に影響し、抑うつを増悪する可能性があることが想定される。例として、友人の悲観的な表情

を想起しやすい者は、自らの対人関係があまりうまくいっていないと解釈するかもしれないと考えられる (杉山ら, 2015)。また、Break & Smith (1983) は、社会不安障害の被験者では自己関連の否定的特性の単語の再生が強いことを示すとしている。Ingram et al. (1987) は、うつ病患者は、自己関連の抑うつ関係特性の形容詞をより再生し、不安障害の学生は不安障害に関連する形容詞をより再生すると指摘している。さらに、特性不安と神経症も気分の状況に関わりなく、個人的経験の再生におけるバイアスと関連付けられている (Mayo, 1989)。気分の強さの強い人や、催眠術にかかりやすい被験者は、ランダムな被験者よりも、顕在的な記憶バイアスが強いと報告されている (Ucross, 1989)。しかし、問題点として、このような被験者の選択が神経症傾向の性格特性と交錯していると指摘されている (Blackburn et al., 1990)。

パーソナリティと潜在記憶バイアスとの関連について、Watkins (2002) は、抑うつ傾向の高い者の行動や経験は、顕在的なプロセスよりも潜在的で非意図的なプロセスに影響を受けるとし、過度の一般化とメンタルフィルターと呼ばれる抑うつ症状を例に挙げて説明している。過度の一般化とは、仕事で一度失敗しただけで「自分は失敗ばかりしている」などごく少ない経験に基づいて解釈したり、未来の予期を行うことと述べている。過度の一般化は、失敗経験を意識的に想起しない場合でも過去の経験の解釈や未来の予期に影響するため、潜在記憶バイアスの一種と言われている。また、メンタルフィルターとは、ある事象にポジティブな面があるにも関わらず、わずかなネガティブな部分だけにとらわれてしまうことを指す。ネガティブな出来事に対して円環的に悩んでしまうのは、潜在的に過去のネガティブな出来事が検索され、より容易に心に浮かぶためと考えられ、潜在記憶バイアスの一種とされている。また、不安症患者は潜在記憶バイアス課題においてより多くの強迫的な単語を作り出したとされている

(Mathews et al., 1989)。また、坂元 (1999) は抑うつ者および高不安者の潜在記憶バイアスを、顕在記憶の出現を抑制する条件と顕在記憶の出現を促進する条件の2つに分けて研究を行っている。その結果、抑うつには潜在記憶バイアスと顕在記憶バイアスがあるものの、不安においては潜在記憶バイアスのみがある可能性を指摘している。

以上より、顕在記憶バイアスないし潜在記憶バイアスは、抑うつや神経症、気分の強さ、不安に大きく関係していると考えられる。また、強い気分にある時や個人的な関係が強い問題である場合にも、記憶のバイアスがより強くなることが予想される。

さらに、近年、記憶バイアスが抑うつを持続させるメカニズムの1つの要因である可能性が指摘されている(杉山ら, 2015)。Watkins (2002) は、抑うつが持続するメカニズムを記憶バイアスの観点から以下のように述べている。記憶バイアスの現象は、うつ病患者や抑うつ傾向の高い者がネガティブな経験を思い出しやすいことを示している。このようなネガティブな記憶へのアクセスの容易さは、抑うつ者が過去のネガティブな経験を思い出した際に、「どうせ、今回もネガティブな結果になるだろう」といったネガティブな予期を産み出し、コーピング活動の開始を妨げることに繋がるとされる。結果として、抑うつ気分へのコーピング活動が開始されず、抑うつ気分の継続する可能性を高めてしまう。このように、記憶バイアスと精神的な健康は相互に影響があり、記憶バイアスがより強くなると抑うつ傾向を促進してしまう可能性が考えられる。

3. 目的

記憶バイアスは抑うつや神経症、気分の強さ、不安に大きく関係していると考えられる。また、強い気分にある時や個人的な関係が強い問題である場合にも、記憶のバイアスがより強くなることが予想される。一方、抑うつや不安以外の

パーソナリティ特性と記憶バイアスとの検討は、次のような研究が散見される程度でまだ十分な検討がなされていない。抑うつや不安などはパーソナリティにおけるさまざまな特性から起因していると言われている。伊藤ら (2005) によると、小中学生において、抑うつが強い人は全般的にやや攻撃性が高く、「短気」、「敵意」が強くと見られるが「言語的な攻撃」はあまり表出しにくい可能性が示唆された。つまり抑うつが強い人は怒りやすく、他人に対して不信的な態度で接するものの、自己主張はあまりしない傾向があると考えられる。また、田中 (2010) によると、抑うつと回避性、固執性との間の関連が示されている。高い回避性は、過度の不安感や予期懸念の高さ、人見知りの激しさ、疲れやすさなどの特徴を示し、こうした特徴を持つ人は抑うつになりやすいことが推測される。固執の低さは、フラストレーションに直面した際のあきらめやすさや根気の無さ、情緒不安などの特徴が挙げられ、根気の無さや情緒不安が抑うつを高め、それと同時に抑うつという経験が、根気の無さや情緒不安を高めるという悪循環が生じていることが示されている。

記憶バイアスについて、抑うつや不安、神経症との関連は示されているものの、パーソナリティ特性との関連についての研究は不十分なままである。そこで、本研究の目的として、パーソナリティと記憶バイアスとの関連性を検討し、記憶バイアスに寄与する心理学的モデルを作成することを目的とする。パーソナリティと記憶バイアスとの関連について把握することで、カウンセリングにおける心理アセスメントやクライアントの語る言葉のより質的な解釈の一助になり得ることが考えられるためである。今回は、投映法によるパーソナリティ検査であるロールシャッハ・テストを用い、無意識的側面からのパーソナリティと記憶バイアスとの関連について検討および心理学的モデルを作成する。

Ⅱ. 対象と調査方法

1. 対象

調査対象者は、京都府内のA大学の学部生および大学院生の男性6名、女性7名、計13名(平均年齢 23.46 ± 2.63 歳、範囲:18~28歳)である。なお、年齢は青年期とみなせる10代から20代までに絞り、調査対象とした。青年期の年齢については、和崎(2012)の概念に準拠した。

2. 調査方法

調査期間は2016年3月から2016年9月であった。ロールシャッハ・テストと記憶バイアス実験の両方の実施を承諾した学生のみ調査対象とした。

3. 質問紙

①フェイスシート

フェイスシートは性別、年齢を記入する欄を設け、また、研究内容と個人情報の取り扱いについての説明文を記載した。

②ロールシャッハ・テスト

ロールシャッハ・テストの実施、コード化およびスコアリングは高橋ら(2006)に従い、包括システムで行った。なお、本研究は日本人の健常者を対象としているため、形態水準のコード化に当たっては、高橋ら(2009)の形態水準表を参照することにした。

③記憶バイアス実験

田上(2003)の記憶バイアス実験を参考に、顕在記憶バイアス実験と潜在記憶バイアス実験を行った。顕在記憶バイアス実験では、秋田(1973)の形容詞の連想反応出現傾向を基に連想対の反応語をターゲット語に設定した。連想価が偏らないように配慮し、ポジティブ、ニュートラル、ネガティブの形容詞連想対各12対、計36対を作成し、ターゲットA18語、B18語に二分した。また学習時に呈示するフィラー語として、連体詞8語を用い、学習リストはフィラー

語8語とターゲットAもしくはB18語の計26語から構成した。被験者には、26語の学習リストの各単語を記憶するように教示した。学習テストの間にフィラー課題を設けた。フィラー課題では1分間の間に、横に並んだ一連の数字の隣接する2数字を足し算し、その和の1の位の数字を間に書き入れるように求めた。その後、学習課題で呈示された単語を思い出して記述するよう求めた。

潜在記憶バイアステストでは、刺激語を潜在記憶テストの手がかり語に設定し、形容詞の連想課題を行った。36語の手がかり語各語から最初に思い浮かんだ形容詞1語を記述するよう求めた。

顕在記憶バイアス実験、潜在記憶バイアス実験でそれぞれ回答が得られたポジティブ、ネガティブ、ニュートラル各語の想起数を数え、割合に変換した。また、ポジティブ語とネガティブ語のバイアス割合を合算し、顕在記憶バイアス得点と潜在記憶バイアス得点をそれぞれ算出した。顕在記憶バイアス得点、潜在記憶バイアス得点いずれも、得点が高いほどバイアスがわかり、記憶が歪んでいる状態であると考えられる。

Ⅲ. 結果

まず、ロールシャッハ・テスト変数と顕在記憶バイアス得点とのSpearmanの順位相関係数を求め、その結果をもとにロールシャッハ・テスト変数を独立変数、顕在記憶バイアス得点、潜在記憶バイアス得点を従属変数とした重回帰分析を行い、記憶バイアス得点に寄与を示すロールシャッハ・テスト変数を抽出し、その寄与率について検討した。またその際に、ロールシャッハ・テスト変数間の相関が高い項目を考慮し、共線性(variance inflation factor: VIF)の値が4以上の項目を削除しながら探索的に重回帰分析を行った。ロールシャッハ・テスト変数を独立変数、顕在記憶バイアス得点を従属変数

とした重回帰分析結果を図1に、ロールシャッハ・テスト変数を独立変数、潜在記憶バイアス得点を従属変数とした重回帰分析結果を図2にそれぞれ示す。

図1より、顕在記憶バイアス得点に対するロールシャッハ・テスト変数との説明力は高く ($R^2=0.777, p<.01$)、とくに m (無生物運動反応)

($\beta =-.514, p<.05$) と $WsumC$ (重みづけた色彩反応) ($\beta =-.514, p<.05$) の寄与率が高いことが明らかとなった。

図2より、潜在記憶バイアス得点に対するロールシャッハ・テスト変数との説明力は高く ($R^2=0.758, p<.05$)、とくに P (平凡反応) ($\beta =-.786, p<.05$) と (2) (ペア反応) ($\beta =-.693,$

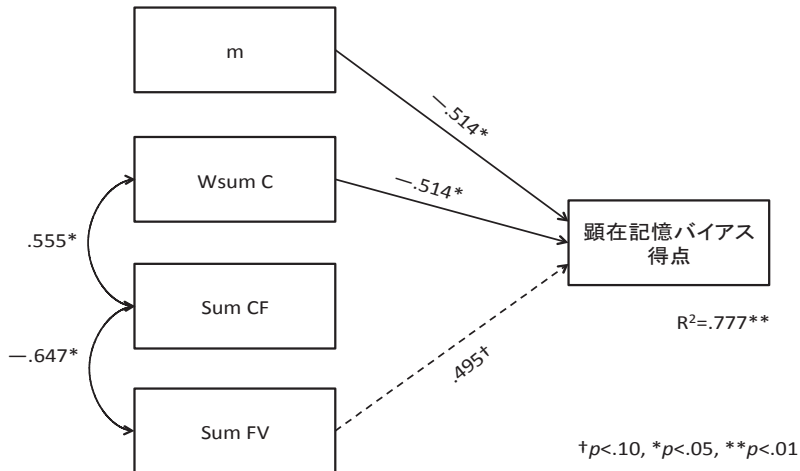


図1. ロールシャッハ・テスト変数を独立変数、顕在記憶バイアス得点を従属変数とした重回帰分析結果

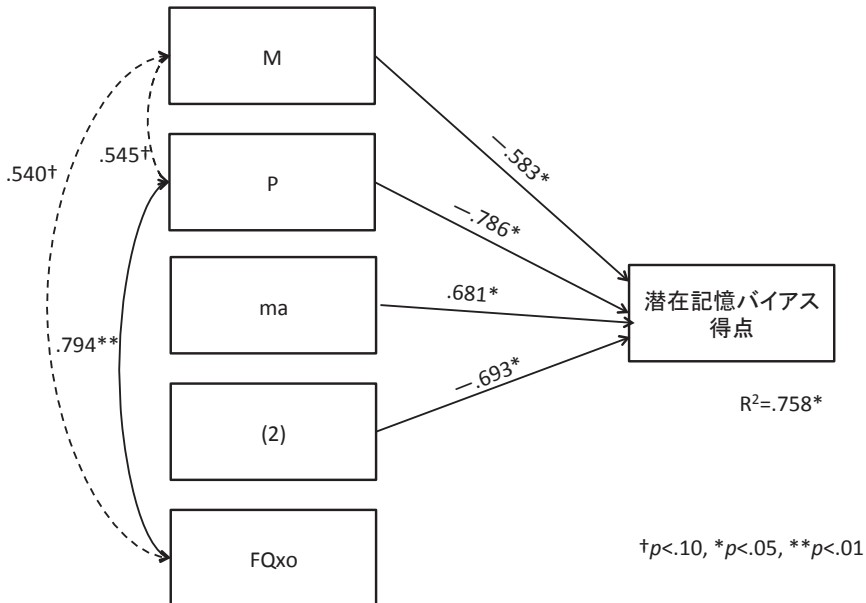


図2. ロールシャッハ・テスト変数を独立変数、潜在記憶バイアス得点を従属変数とした重回帰分析結果

$p < .05$) の寄与率が高いことが明らかとなった。

次に、顕在性記憶バイアス得点と潜在記憶バイアス得点をそれぞれネガティブ得点、ポジティブ得点に分けて算出した。次に、ロールシャッハ・テスト変数との Spearman の順位相関係数を求めた。その結果をもとにロールシャッハ・テスト変数を独立変数、顕在ネガティブ得点、顕在ポジティブ得点、潜在記憶ネガティブ得点、潜在記憶ポジティブ得点を従属変数とした重回帰分析を行い、記憶のポジティブ、ネガティブ得点に寄与を示すロールシャッハ・テスト変数を抽出し、その寄与率について検討した。またその際に、ロールシャッハ・テスト変数間の相関が高い項目を考慮し、VIF の値が4以上の項目を削除しながら探索的に重回帰分析を行った。顕在記憶ネガティブ得点、顕在記憶ポジティブ得点に寄与を示すロールシャッハ・テスト変数とのモデルを図3に、潜在記憶ネガティブ得点、潜在記憶ポジティブ得点に寄与を示すロールシャッハ・テスト変数とのモデルを

図4に示す。

図3より、顕在記憶バイアスにおいて顕在記憶ネガティブ得点、顕在記憶ポジティブ得点いずれも A (動物全体反応) が寄与しており、顕在記憶ネガティブ得点には負の、顕在記憶ポジティブ得点には正の影響があることが明らかとなった。

また、図4より、潜在記憶ネガティブ得点において Ls (風景反応) が寄与しており、潜在記憶ネガティブ得点に正の影響があることが明らかとなった。また、潜在記憶ポジティブ得点において MQo (人間運動反応における形態水準が普通反応)、Sum V (展望反応) が寄与しており、MQo (人間運動反応における形態水準が普通反応) は潜在記憶ポジティブ得点に正の影響が、Sum V (展望反応) は潜在記憶ポジティブ得点に負の影響があることが明らかとなった。

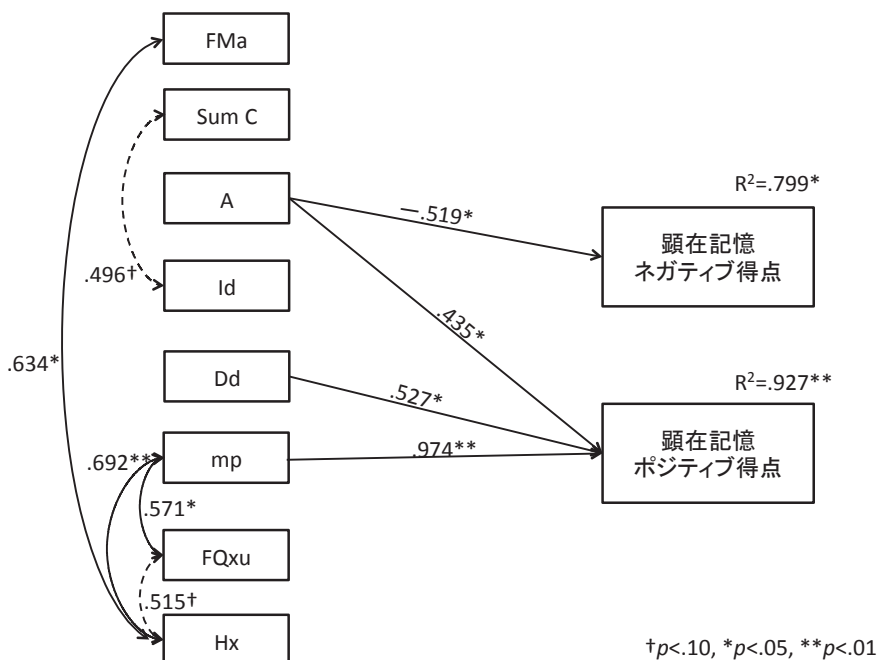


図3. ロールシャッハ・テスト変数を独立変数、顕在記憶バイアスにおけるネガティブ・ポジティブ得点を従属変数とした重回帰分析結果

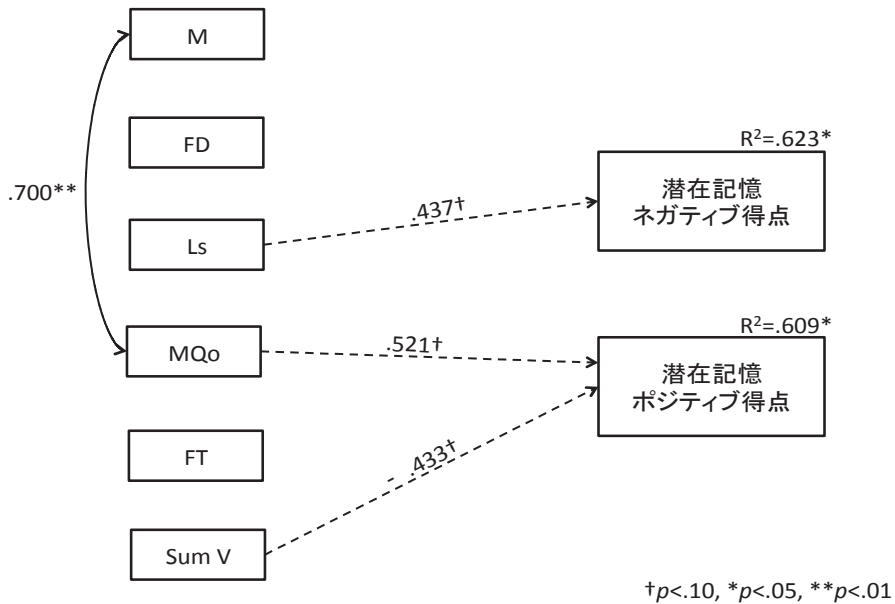


図 4. ロールシャッハ・テスト変数を独立変数、潜在記憶バイアスにおけるネガティブ・ポジティブ得点を従属変数とした重回帰分析結果

IV. 考察

重回帰分析の結果、顕在記憶バイアス得点に対するロールシャッハ・テスト変数との説明力は高く、m（非生物運動反応）、Wsum C（重みづけられた総色彩反応）、Sum FV（総形態展望反応）が顕在記憶バイアス得点に寄与を示した。また、潜在記憶バイアス得点に対するロールシャッハ・テスト変数との説明力は高く、M（人間運動反応）、P（平凡反応）、ma（非生物積極的運動反応）、(2)（ペア反応）が潜在記憶バイアス得点に寄与を示した。以上の結果から、顕在記憶バイアス得点における m（非生物運動反応）、Wsum C（重みづけられた総色彩反応）、Sum CF（総色彩形態反応）、Sum FV（総形態展望反応）について、また潜在記憶バイアス得点における M（人間運動反応）、P（平凡反応）、ma（非生物積極的運動反応）、(2)（ペア反応）について、ロールシャッハ・テスト変数各々の解釈仮説を参照し、顕在記憶バイアス得点ないし潜在記憶バイアス得点との関連について考察を行

う。

1. 顕在記憶バイアス得点

【m（無生物運動反応）】

m（無生物運動反応）は、顕在記憶バイアス得点に対して強い負のパスを示した。この結果から、m（無生物運動反応）の値が高くなると、顕在記憶バイアスが低くなる傾向があることが明らかとなった。Exner（2003/2009）は、m（無生物運動反応）は注意が行き届かないところから、割り込んでくる思考と関係しており、このような思考が増加すると注意や集中力が干渉を受けたり、判断が曇らされたりしやすいとしている。そのため、先行研究とは一致せず、反対の結果となったと言えよう。また、高橋ら（2007）は、m（無生物運動反応）は状況から生じた急性の心理的混乱や不安の影響を受けやすい指標と考えられていると述べている。また、従来、欲求を実現出来ないことによる緊張や葛藤の存在、パーソナリティの統合を脅かすような自分で統制出来ない衝動の存在、対人関係を中心と

した欲求不満の経験、急性の精神の混乱状態、無力感、自己観察の傾向に関連するとも言われている。

【Wsum C (重みづけられた色彩反応)】

Wsum C (重みづけられた色彩反応) は、顕在記憶バイアス得点に対して強い負のパスを示した。この結果から、Wsum C (重みづけられた色彩反応) が高くなると、顕在記憶バイアスは低くなる傾向があることが明らかとなった。Exner (2003/2009) は、有彩色反応 (FC, CF, C) は、感情を発散させたり吐き出すことや、それらがどの程度コントロールされ調節されるのかと言うことと関係していると述べている。また、感情の表出が過度に抑えられると、それは心に苦痛を与えたり、時には心の動きを悪くするほどの重荷となると述べている。さらに、この特徴が性格特性のようになってくると、感情を内にとどめておくことによって、緊張、不安、抑うつなどの感情の混乱はもちろんのこと、頭痛、胃や腸の疾患、血圧の変動などのさまざまな身体的症状が起りやすくなると指摘している。このことから、Wsum C (重みづけられた色彩反応) は感情を適切に表出出来る状態を示しており、そのため、感情を適切に表出出来る状態にある時、緊張、不安、抑うつなどの感情の混乱が起りにくく、顕在記憶バイアスは低くなると考えられる。

【Sum FV (形態展望反応)】

Sum FV (形態展望反応) は、顕在記憶バイアス得点に対して強い正のパスを示した。この結果から、Sum FV (形態展望反応) が高くなると、顕在記憶バイアスも高くなる傾向があることが明らかとなった。Exner (2003/2009) は、V (濃淡立体反応) は自分に目を向けたり、自分についてよく考えた結果生じた、ネガティブな感情体験に関係していると述べている。また、反応が見られる場合は、自分で良くないと思っているネガティブな特徴を何度も省み、その結果不快感や苦痛が生じていることを示していると指摘している。また、高橋 (2007) においても、

自分が無価値な存在という劣等感、不適切感、卑小感、不機嫌、不快感、自己破壊的な考え、抑うつ、無力感などを表すと述べている。抑うつつの面に関しては、第1章で述べた坂元 (1999) の抑うつの高い人は顕在記憶バイアスも高くなるという先行研究の知見に合致していると言え、ロールシャッハ・テスト変数におけるネガティブな感情体験ないし抑うつ指標が高いと、顕在記憶バイアスがより高くなると考えられる。

2. 潜在記憶バイアス得点

【M (人間運動反応)】

M (人間運動反応) は、潜在記憶バイアス得点に対して強い負のパスを示した。この結果から、M (人間運動反応) が高くなると、潜在記憶バイアスは低くなる傾向があることが明らかとなった。

Exner (2003/2009) は、M (人間運動反応) はその人が同一視していたり、とらわれていたりする特性のいくつか表れているものであり、自己イメージもしくはセルフエスティームに関連するものと述べている。そのため、自己イメージもしくはセルフエスティームが高いと、潜在記憶バイアスが低くなる傾向があると考えられる。なお、M (人間運動反応) を解釈するには、形態水準を考慮に入れる必要があり、注意が必要となる。

【P (平凡反応)】

P (平凡反応) は、潜在記憶バイアス得点に対して強い負のパスを示した。この結果から、P (平凡反応) が多くなると、潜在記憶バイアス得点は低くなる傾向があることが明らかとなった。Exner (2003/2009) によると、明確な状況の中において常識的・慣習的な行動をとれることを示すとされており、現実検討力と関係していると考えられる。したがって、常識的で現実検討力が高いと、潜在記憶バイアスは低くなると考えられる。一方、Exner (2003/2009) は、P (平凡反応) が多すぎると慣習や正確さについて

一般的でないほどの関心を示し、社会的に期待され受け入れられる行動に執着してしまう傾向があり、完全主義であると述べており、注意が必要である。

【ma（無生物積極的運動反応）】

ma（無生物積極的運動反応）は、潜在記憶バイアス得点に対して強い正のパスを示した。この結果から、ma（無生物積極的運動反応）が多くなると、潜在記憶バイアス得点は高くなる傾向があることが明らかとなった。顕在記憶バイアス得点での考察において述べた通り、m（無生物運動反応）は注意が行き届かないところから、割り込んでくる思考と関係しており、このような思考が増加すると注意や集中力が干渉を受けたり、判断が曇らされたりしやすいとしている。また、高橋ら（2007）によると、m（無生物運動反応）は自分で統制出来ない衝動性や精神の混乱を表すと指摘されている。a（積極的運動反応）については、積極的・活動的に行動し、自分の要求に従って他者に支配的に行動する傾向が強いと述べている。さらに、ma（無生物積極的運動反応）は「ロケットが火を噴いて進んで行く」、「炎が燃えている」と言うように、攻撃性に関連しているとされ、パーソナリティ特性として持続する面があるとも述べている。このことから、ma（無生物積極的運動反応）は自身では制御できない衝動性から他者に支配的となり、攻撃性の高さに関連しており、衝動性・攻撃性が高いと、潜在記憶バイアスも高いことが示唆される。

【(2)（ペア反応）】

(2)（ペア反応）は、潜在記憶バイアス得点に対して強い負のパスを示した。この結果から、(2)（ペア反応）が多くなると、潜在記憶バイアス得点は低くなる傾向があることが明らかとなった。高橋ら（2007）によると、(2)（ペア反応）は自己への関心の程度を表し、より成熟した自己への注目の程度を示していると指摘されている。そのため、自己に関心があり、成熟した自己への注目が高いほど、潜在記憶バイアス

は低くなると考えられる。

以上より、顕在記憶バイアス得点において、ネガティブな感情体験ないし抑うつ指標が高いと、顕在記憶バイアスがより高くなる一方、感情を適切に表出出来る状態にある時、緊張、不安、抑うつなどの感情の混乱が起こりにくく、顕在記憶バイアスは低くなると考えられる。

また、割り込んでくる思考が多く、注意や集中力が干渉を受けたり、判断が曇らされたりしやすい場合も顕在記憶バイアスは低くなるという結果となった。これは、注意力や判断力が低下し、自己への関連づけまで思考が至らず、顕在記憶バイアスが低くなったと考えられる。

次に、潜在記憶バイアス得点において、衝動性・攻撃性が高いと、潜在記憶バイアスも高い一方、自己イメージもしくはセルフエスティームが高く、自己に関心があり、成熟した自己への注目が高く、常識的で現実検討力が高いと、潜在記憶バイアスは低くなると考えられる。

次に、顕在記憶ネガティブ・ポジティブ得点と潜在記憶ネガティブ・ポジティブ得点にそれぞれ分け、ロールシャッハ・テスト変数との関連を調べるために重回帰分析を行った。その結果、いずれの得点もロールシャッハ・テスト変数との説明力は高く、A（動物全体反応）が顕在記憶ネガティブ得点に寄与を、A（動物全体反応）、Dd（特殊部分反応）、mp（無生物消極的運動反応）が顕在記憶ポジティブ得点に寄与を、Ls（風景反応）が潜在記憶ネガティブ得点に寄与を、MQo（人間運動反応における形態水準が普通反応）、Sum V（総展望反応）が潜在記憶ポジティブ得点に寄与を示した。

以上の結果から、顕在記憶ネガティブ・ポジティブ得点における A（動物全体反応）、Dd（特殊部分反応）、mp（無生物消極的運動反応）について、また潜在記憶ネガティブ・ポジティブ得点における Ls（風景反応）、MQo（人間運動反応における形態水準が普通反応）、Sum V（総展望反応）について、ロールシャッハ・テスト変数各々の解釈仮説を参照し、顕在記憶ネガ

タイプ・ポジティブ得点ないし潜在記憶ネガティブ・ポジティブ得点との関連について考察を行う。

3. 顕在記憶ネガティブ・ポジティブ得点

【A（動物全体反応）】

A（動物全体反応）は、顕在記憶ネガティブ得点に対して強い負のパスを、顕在記憶ポジティブ得点に対して強い正のパスを示した。この結果から、A（動物全体反応）が多くなると、顕在記憶ネガティブ得点は低く、顕在記憶ポジティブ得点は高くなる傾向があることが明らかとなった。高橋ら（2007）によると、A（動物全体反応）が多いことは思考の仕方や行動が紋切り型であり、乏しい想像力や抑うつ的な感情を示すと述べられている。つまり、思考の仕方や行動が紋切り型で想像力が乏しく、抑うつ感を抱いていると、ポジティブな単語を記憶し、ネガティブな単語の記憶は抑制されると考えられる。

【Dd（特殊部分反応）】

Dd（特殊部分反応）は顕在記憶ポジティブ得点に対して強い正のパスを示した。この結果から、Dd（特殊部分反応）が多くなると、顕在記憶ポジティブ得点は高くなることが明らかとなった。高橋ら（2007）によると、Dd（特殊部分反応）は不安を和らげるために細かい仕事に没頭する傾向や、表面的・非本質的なことに逃避する傾向に関連しているとされている。このことから、不安感からの逃避傾向が高い人ほど、ポジティブな単語を記憶していると考えられる。

【mp（無生物消極的運動反応）】

mp（無生物消極的運動反応）は、顕在記憶ポジティブ得点に対して強い正のパスを示した。この結果から、mp（無生物消極的運動反応）が多くなると、顕在記憶ポジティブ得点は高くなることが明らかとなった。高橋ら（2007）によると、p（消極的運動反応）は他者をリードするよりも責任を他者に帰し、他者の決定や指導に

従い、依存する可能性が大きいとされている。つまり、mp（無生物消極的運動反応）は注意や集中力が干渉を受けたり、判断が曇らされたりしやすく、自分で統制出来ない精神の混乱のために他者に依存しやすい傾向を指し、その傾向が高いとポジティブな単語を記憶しやすいと考えられる。

4. 潜在記憶ネガティブ・ポジティブ得点

【Ls（風景反応）】

Ls（風景反応）は、潜在記憶ネガティブ得点に対して正のパスを示した。この結果から、Ls（風景反応）が多くなると、潜在記憶ネガティブ得点は高くなることが明らかとなった。高橋ら（2007）によると、Ls（風景反応）は争いや批判を避ける傾向を表し、時には劣等感を抱いたり、依存欲求が満たされない孤独感や不安に関連すると考えられている。このことから、孤独感や不安が高いと、潜在記憶ネガティブ得点は高くなると考えられる。

【MQo（人間運動反応における形態水準が普通反応）】

MQo（人間運動反応における形態水準が普通反応）は、潜在記憶ポジティブ得点に対して正のパスを示した。この結果から、MQo（人間運動反応における形態水準が普通反応）が多くなると、潜在記憶ポジティブ得点は高くなることが明らかとなった。高橋ら（2007）によると、MQo（人間運動反応における形態水準が普通反応）は通常の健康な思考を反映していると考えられている。このことから、健康的な思考を持っている人ほど、潜在記憶ポジティブ得点は高くなると考えられる。

【Sum V（濃淡立体変数）】

Sum V（濃淡立体変数）は、潜在記憶ポジティブ得点に対して負のパスを示した。この結果から、Sum V（濃淡立体変数）が多くなると、潜在記憶ポジティブ得点は低くなることが明らかとなった。Exner（2003/2009）は、Sum V（濃淡立体変数）は自分に目を向けたり、自分につい

てよく考えた結果生じた、ネガティブな感情体験に関係していると述べている。また、反応が見られる場合は、自分で良くないと思っているネガティブな特徴を何度も省み、その結果不快感や苦痛が生じていることを示していると記述している。また、高橋ら(2007)においても、自分が無価値な存在という劣等感、不適切感、卑小感、不機嫌、不快感、自己破壊的な考え、抑うつ、無力感などを表すと指摘されている。このことから、抑うつや無力感が高い人は、潜在記憶ポジティブ得点は低くなると考えられる。

以上より、顕在記憶バイアス得点においては、思考の仕方や行動が紋切り型で想像力が乏しく、抑うつ感を抱いていると、ポジティブな単語をより記憶し、ネガティブな単語の記憶は抑制されると考えられる。また、不安感からの逃避傾向が高い人ほど、ポジティブな単語をより多く記憶していると考えられる。潜在記憶バイアス得点においては、孤独感や不安が高いと、潜在記憶ネガティブ得点は高くなると考えられる。また、抑うつや無力感が高い人は、潜在記憶ポジティブ得点は低くなると考えられる。

V. 総合考察

ロールシャッハ・テスト変数と記憶バイアスとの関連を重回帰分析したところ、顕在記憶バイアス得点に対して Sum FV (総形態展望反応) が正の有意なパスを、m (非生物運動反応)、Wsum C (重みづけられた総色彩反応) が負の有意なパスを示した。また、潜在記憶バイアス得点に対して ma (非生物積極的運動反応) が正の有意なパスを、M (人間運動反応)、P (平凡反応)、(2) (ペア反応) が負の有意なパスを示した。このことから、顕在記憶バイアスは、その程度を特徴づける要因としてネガティブな感情体験ないし抑うつ指標が高いと、顕在記憶バイアスがより高くなる一方、感情を適切に表出出来る状態にある時、緊張、不安、抑うつなどの

感情の混乱が起こりにくく、顕在記憶バイアスは低くなると考えられる。また、割り込んでくる思考が多く、注意や集中力が干渉を受けたり、判断が曇らされたりしやすい場合も顕在記憶バイアスは低くなるという結果となった。これは、注意力や判断力が低下し、自己への関連づけまで思考が至らず、顕在記憶バイアスが低くなったと考えられる。潜在記憶バイアスは、その程度を特徴づける要因として衝動性・攻撃性が高いと、潜在記憶バイアスも高い一方、自己イメージもしくはセルフエスティームが高く、自己に関心があり、成熟した自己への注目が高く、常識的で現実検討力が高いと、潜在記憶バイアスは低くなると考えられる。

本研究では、顕在記憶バイアス得点、潜在記憶バイアス得点をそれぞれ顕在記憶ネガティブ得点、顕在記憶ポジティブ得点、潜在記憶ネガティブ得点、潜在記憶ポジティブ得点に分けて分析を行った。その結果、顕在記憶バイアス得点においては、思考の仕方や行動が紋切り型で想像力が乏しく、抑うつ感を抱いていると、ポジティブな単語をより記憶し、ネガティブな単語の記憶は抑制されると考えられる。また、不安感からの逃避傾向が高い人ほど、ポジティブな単語をより多く記憶していると考えられる。この結果は、これまでの先行研究と一致しない結果となった。一方、潜在記憶バイアス得点においては、孤独感や不安が高いと、潜在記憶ネガティブ得点は高くなると考えられる。また、抑うつや無力感が高い人は、潜在記憶ポジティブ得点は低くなり、通常健康的な思考を持っている人ほど潜在記憶ポジティブ得点は高くなると考えられる。

以上の結果になった原因として、意識的想起と無意識的想起の違いが関連していると考えられる。顕在記憶は意識的な想起課題であるため、被験者はネガティブな気分を抱いたことを自身に認めず、反対にポジティブなものを意識的に想起することでネガティブな気分の軽減を図ろうとしたことが推察される。また、意識的な想

起の場合、ネガティブな単語を想起しないような方略を使うことが出来る可能性も考えられる。一方、潜在記憶は無意識における想起であるため、ネガティブな感情や不安の影響を大きく受けたものと思われる。無意識的な想起の場合、意識的な操作が出来ないため、ネガティブな感情体験が生じた際に影響を受けやすいと考えられる。

最後に、本研究の限界として、サンプル数の少なさやサンプルの範囲の狭さ（青年期のみに限定したこと）がある。サンプルの制約により、妥当性、信頼性の点で十分に信頼出来るモデルの作成には至らなかった。今後、より妥当性と信頼性のあるモデルの再構築と検証を行う必要があるだろう。

謝辞

本論文は、花園大学大学院社会福祉学研究所臨床心理学領域の2016年度修士論文としてまとめたものから一部分を抽出し、再構成したものである。なお、修士論文の執筆にあたり、ご指導いただいた小海宏之教授にこの場を借り、深甚の謝意を表します。

文献

- Adolphs, R., Cahill, L., Schul, R., & Babinsky, R. (1997). Impaired declarative memory for emotional material following bilateral amygdala damage in humans. *Learning Memory*, 4, 291-300.
- 秋田清 (1973). 形容詞 126 語の連想反応出現傾向. 同志社大学 人文学, 125, 63-102.
- Bear, M. F., Connors, B. W., & Paradiso, M. A. (2007). *Neuroscience: Exploring the brain* (3rd edition). Baltimore, MD: Lippincott Williams & Wilkins Inc.
- Blackburn, I. M., Cameron, C. M., & Deary, I. J. (1990). Individual differences and response to the Velten Mood Induction Procedure. *Personality and Individual Differences*, 11, 725-731.

- Break, B. E., & Smith, S. H. (1983). Selective recall of self-descriptive traits by socially anxious and nonanxious females. *Social Behavior and Personality*, 11, 71-76.
- Disner, S. G., Beevers, C. G., Haigh, E. A. P., & Beck, A.T. (2011). Neural mechanisms of the cognitive model of depression. *Nature Reviews Neuroscience*, 12, 467-477.
- 枝川義邦(2006). 情動による記憶強化のしくみ. 生活工学研究, 8, 188-193.
- Exner, J. E. (2003). *The Rorschach: A comprehensive system. Vol 1. Basic Foundations and Principles of Interpretation. (4th edition)*. New Jersey: John Wiley & Sons. 中村 紀子・野田昌道 (監訳) (2009). ロールシャッハ・テスト—包括システムの基礎と解釈の原理. 金剛出版.
- Eysenck, M. W. (1992). *Anxiety: The cognitive perspective*. Hove: Erlbaum.
- 藤原裕弥・岩永誠・生和秀敏・作村雅之 (2002). 不安における注意バイアス、潜在記憶バイアスに関する研究. 行動療法研究, 27(1), 13-23.
- Ingram, R. E., Kendall, P. C., Smith, T. W., Donnell, C., & Ronan, K. (1987). Cognitive specificity in emotional distress. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 734-742.
- 伊藤拓・竹中晃二・上里一郎 (2005). 抑うつ心の心理的要因の共通要素—完全主義、粘性性格、非機能的態度と抑うつ状態の関連性におけるネガティブな反すうの位置づけ—. 教育心理学研究, 53, 162-171
- Kolb, B., & Whishaw, I. Q. (1995). *Fundamentals of human neuropsychology: 4th edition*. New York: W. H. Freeman.
- Matt, G. E., Vazquez, C., & Campbell, W. K. (1992). Mood-congruent recall of affectively toned stimuli: A meta-analytic review. *Clinical Psychology Review*, 30, 691-709.
- 松本 昇 (2015). PTSD の記憶障害—意図的想起と無意図的想起における問題とその介入— 心理学評論, 58, 451-484.

- Mayo, P. R. (1989). A further study of the personality-congruent recall effect. *Personality and Individual Differences*, *10*, 247-252.
- Mathews, A., & MacLeod, C. (1994). Cognitive approaches to emotion and emotional disorders. *Annual Review of Psychology*, *45*, 25-50.
- Mathews, A., Mogg, K., May, J., & Eysenck, M. W. (1989). Implicit and explicit memory biases in anxiety. *Journal of Abnormal Psychology*, *98*, 236-240.
- Packard, M. G., Cahill, L., & McGaugh, J. L. (1994). Amygdala modulation of hippocampal-dependent and caudate nucleus-dependent memory processes. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, *91*, 8477-8481.
- Ridout, N., Noreen, A., & Johal, J. (2009). Memory for emotional faces in naturally occurring dysphoria and induced sadness. *Behavior Research and Therapy*, *47*, 851-860.
- 坂元桂 (1999). 抑うつ者および高不安者のネガティブ情報に対する潜在記憶バイアスメタ認知による分析. *性格心理学研究*, *7* (2), 57-65.
- 沢田忠治 (1956). 性格類型学研究—性格診断の一方法—. *教育心理学研究*, *4* (2), 79-86.
- Schacter, D. L., & Tulving, E. (1994). *Memory systems*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Spreen, O., Strauss, E. (1998). *A compendium of neuropsychology tests: 2nd edition*. Oxford University Press, USA. 秋元波留夫 (監修)・滝川守国・前田久雄・三山吉夫・藤元登四郎 (監訳) (2004). *神経心理学検査法*. 創造出版.
- Steinvorth, S., Levine, B., & Corkin, S. (2005). Medical temporal lobe structures are needed to re-experience remote autobiographical memories: evidence from H. M. and W. R. *Neuropsychologia*, *43*, 479-496.
- 杉山崇・越智啓太・丹藤克也 (2015). 記憶心理学と臨床心理学のコラボレーション. 北大路書房.
- 田上恭子 (2003). 抑うつの程度が潜在記憶に及ぼす影響. *弘前大学教育学部紀要*, *90*, 193-199.
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 (2006). *ロールシャッハ・テスト実施法*. 金剛出版.
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 (2007). *ロールシャッハ・テスト解釈法*. 金剛出版.
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 (2009). *ロールシャッハ・テスト形態水準表*. 金剛出版.
- 田中麻美 (2010). パーソナリティが中学生の抑うつの変化に及ぼす影響. *パーソナリティ研究*, *18* (3), 187-195.
- Terr, L. C., Bloch, D. A., Michel, B. A., Hong, S., Reinhartdt, J. A., & Metayer, S. (1996). Children's memories in the wake of challenger. *American Journal of Psychiatry*, *153*, 618-625.
- Ucros, C. G. (1989). Mood state-dependent memory: A meta-analysis. *Cognition and Emotion*, *3*, 139-167.
- 和崎光太郎 (2012). 近代日本における「煩悶青年」の再検討: 1990年代における青年の変容過程. 「日本の教育学史」教育史学会紀要, *55*, 19-31.
- Watkins, P. C. (2002). Implicit memory bias in depression. *Cognition & Emotion*, *16*, 381-402.
- Wells, A. & Matthews, G. (1994). *Attention and emotion: A clinical perspective*. Lawrence Erlbaum Associates Ltd. 箱田裕司・津田彰・丹野義彦 (監訳) (2002). *心理臨床の認知心理学—感情障害の認知モデル*. 培風館.

